

〈科学的社会主義の古典選書〉

# インタナショナル

マルクス

不破哲三◆編集・文献解説

新日本出版社

### 編集者のまえがき

今回、古典選書の新しい試みとして、マルクス、エンゲルスの二つの選集——マルクス『インタナショナル』とエンゲルス『多数者革命』を編集・刊行することにしました。

この二つの分野は、マルクス、エンゲルスの理論展開の重要な領域でありながら、まとまった著作がないために、『マルクス・エンゲルス全集』で個々に必要な文献を拾って読む以外には接近することがむずかしい分野になっていましたが、現在では、その全集の入手もいよいよ困難になっています。

そういう状況を考えて、この二つの選集を編むことにしました。翻訳は、『全集』日本語版を刊行してきた大月書店の了解をえて、『全集』でやりとげてきた成果を利用していただくことになりました。

マルクス『インタナショナル』では、創立（一八六四年）からヨーロッパでの活動終結（一八七二年）までおよびその後の関連文献二五篇を選びました。インタナショナルの活動の歴史とそこでのマルクス、エンゲルスの主要な発言が分かるものとするように努力したつもりです。

エンゲルス『多数者革命』は、ドイツで労働者党の議会・選挙活動が現実の問題になり、多数者革命という革命路線が姿を見せはじめた一八六〇年代から、エンゲルスがマルクスの著作『フランスにおける階級闘争』を編集し、その「序文」で多数者革命路線の歴史的総括をまとめた一八九五年まで、約三〇年にわたる諸文献一九篇を収録しました。そこには、ドイツを中心に、ヨーロッパとアメリカの革命運動の情勢と路線

を考察したこの時期の主要な論文が収められています。

選集の表題を、マルクス『インタナショナル』、エンゲルス『多数者革命』としたのは、前者ではマルクスの文献、後者ではエンゲルスの文献が、圧倒的な比重を占めているからです。どちらも、科学的社会主義の立場での革命論の探究という、二人の共同の事業、共同の考察を表現した選集ですから、あわせて活用していただければありがたい、と思います。

編集にあたっては、全体についての編集者の解説はおこなわず、論稿ごとに「文献解説」をつけました。それを読みつぐことで、ある程度、全体の流れをつかんでいただければありがたい、と思います。

最後に、凡例的な事項について、述べます。

1. 翻訳は、大月書店の『全集』版を継承させていただきました。訳語の統一の観点から、また私たちの研究の反映として、訳語や訳文を変更したところがごく一部にありますが、その箇所できくに特記することはありませんでした。

2. 収録した文献に、マルクス、エンゲルスが責任を負ういろいろな言語での版がある場合、『全集』では、もともとの文章からの翻訳を基本にしながら、他国語の版との相違をこまかく注記することをきまりにしていたようです。この選集では、この種の注記は全体としては省略し、とくに重要な意味を持つ場合にかぎって、版の違いによる変更を文中へとして注記しました。

3. マルクス、エンゲルスは、古典の文章や慣用句などを引用する場合、その原典の原語での表現のままでおこなうことがしばしばあります。その場合、『全集』版では、日本語訳に原語の字句を併記していましたが、ここでは、それらはすべて省略しました。

4. 「注」については、『全集』には、各巻の最後にある編集部「注」にくわえ、訳者の「注」や文中「〔〕」内に訳者がつけた「注」などがあります。それらも参考にしながら、この選集なりの内容と手法で、文献を読む上で必要な「注」をつける努力をしました。

「注」の付け方は、次の通りです。

1. \*印を付した注および文中の丸括弧（ ）の注は、マルクス、エンゲルスが付けたもの。
2. 編集者の注は、〔★〕印と論文ごとの通し番号をつけてその箇所を示し、注記の内容はその論文の末尾に一括して掲げました。ただ、原文の脱落箇所などは、その箇所を〔#〕印で示し、その段落のあとに説明をつけました。

なお、人名、地名、事項などの短い説明は、文中に角括弧〔 〕で挿入しました。

二〇一〇年六月

不破 哲三

目次

編集者のまえがき 3

マルクス 国際労働者協会創立宣言(一八六四年) 9

マルクス 国際労働者協会暫定規約(一八六四年) 26

マルクス エンゲルスへの手紙 一八六四年一月四日付 31

〔国際労働者協会の創立経過について〕

マルクス アメリカ大統領エーブラハム・リンカーンへ(一八六四年) 40

マルクス 個々の問題についての暫定中央評議会代議員への指示(一八六六年) 46

——ジュネーヴでの第一回大会——

マルクス プリュッセルでの第三回大会への総評議会の報告(一八六八年) 65

マルクス 「国際社会民主同盟の綱領と規約」への評注(一八六八年) 76

マルクス 国際労働者協会と国際社会民主同盟(一八六八年) 87

マルクス 相続権についての総評議会の報告(一八六九年) 91

マルクス バーゼルでの第四回大会への総評議会の報告(一八六九年) 97

マルクス 非公開通知(一八七〇年) 119

マルクス フランスIIプロイセン戦争についての第一の呼びかけ(一八七〇年) 141

マルクス フランスIIプロイセン戦争についての第二の呼びかけ(一八七〇年) 154

エンゲルス 国際労働者協会スペイン連合評議会へ(一八七一年) 170

マルクス フランスにおける内乱——国際労働者協会総評議会の呼びかけ

(一八七一年)〔文献解説のみ〕 176

マルクス エンゲルス ジュール・ファールヴルの回状についての総評議会の声明

(一八七一年) 179

マルクス 「ザ・ワールド」紙通信員とのインタビュー(一八七一年) 184

エンゲルス マツツイーニのインタナショナルにたいする関係について(一八七二年) 197

マルクス エンゲルス 労働者階級の政治活動について(一八七一年) 202

(ロンドン協議会での発言と決議)

1 マルクスの発言 2 マルクスの発言 3 エンゲルスの発言

4 ロンドン協議会の決議

- マルクス 土地の国有化について（一八七二年） 215
- マルクス ハーグでの第五回大会への総評議会の報告（一八七二年） 222
- マルクス ハーグ大会についての演説（一八七二年） 238
- マルクス 政治問題への無関心（一八七三年） 242
- エンゲルス 権威について（一八七三年） 253
- マルクス 「バクーニンの著書『国家制と無政府』摘要」から（一八七四〜七五年） 259
- マルクス ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史（一八七八年） 268

## マルクス 国際労働者協会創立宣言（一八六四年）

〔文献解説〕 一八六四年九月二八日、ロンドンのセント・マーティンズ・ホールで、大きな国際的労働者集会が開かれた。これは、イギリスの労働組合の指導者たちとパリの労働者グループ（ブルードン派）が準備したもので、マルクスをふくめ、当時ロンドンに住んでいた各国の亡命者や運動家たちも招かれて出席した。会議の直接の主題は、ポーランドの民族解放運動との連帯にあったが、集会のなかで国際組織結成の提案がおこなわれて、国際労働者協会（のちにインタナショナルと呼ばれる）を創立することが決議され、当面の中央機関として暫定委員会を選出した。

「創立宣言」と「暫定規約」は、いろいろな経緯があったが、最後はマルクスが執筆を引き受け、その案が、一八六四年一月一日の暫定委員会で全員一致で採択された。そこにいたる諸事情は、マルクスからエンゲルスへの手紙（六四年一月四日付）〔後出〕に詳しい。

「創立宣言」の底本としては、イギリスの「ビー・ハイヴ」紙〔★1〕（六四年一月五日付）に最初に発表された英語版と、全ドイツ労働者協会の機関紙「ゾツィアールデモクラ

「ト」〔★2〕（六四年二月二日および三〇日付）に掲載されたドイツ語版がある。後者も、依頼されてマルクスが寄稿したもので、そのさいマルクス自身が文章や字句の不足を補ったところが、何箇所かある。本書では、ドイツ語版での変更部分は、（ ） つきで挿入してある。

### 労働者諸君

一八四八年から一八六四年にいたるあいだに労働者大衆の貧困が減少しなかったことは、顕著な事実である。しかも、これは、類例がないほど工業が発展し商業が拡大した時期であった。一八五〇年のことであるが、非常に情報に通じたイギリスの中間階級〔★3〕の穏健な一機関紙が、もしイギリスの輸出入が五〇%のびれば、イギリスには窮民というものはなくなるだろう、と予言したことがあった。ところがなんということだろう！ 一八六四年四月七日、大蔵大臣〔グラッドストーン〕は次のように言明して、聴き手の議員たちを大喜びさせた〔★4〕。イギリスの輸出入貿易総額は一八六三年には「四億四三九五万五〇〇ポンドに」増大した！ 「これは、さほど遠い昔ではない一八四三年の貿易額の約三倍という驚くべき金額である」と。にもかかわらず、彼は「貧困」について雄弁をふるった。彼は叫んで言った。「貧困の境涯に沈もうとしている人々の身の上」を、「いっこうに上がらない……賃金」を、「一〇中九まで生存のための闘争にすぎない……人生」を、「考えてもみよ！」と。北部では機械によって、南部では牧羊場によってしだいに駆逐されつつあるアイルランドの人民については、彼はなにも言わなかった。もっとも、あの不幸な国土

では、その羊でさえ、人間ほどに急速ではなくとも減少しつつあるのだが。彼はまた、一万人の上流人士の最高の代表者たち〔上院議員〕がついさきごろ突然の恐怖の発作におそわれて打ち明けた事柄を、くりかえして述べることもしなかった。首絞め強盗騒ぎ〔★5〕がかなりの高潮に達したとき、上院は流刑と懲役の状況の調査をやらせ、それについての報告書を公表させた。一八六三年の膨大な青書〔★6〕で、実情が明るみにだされた。そこで公認の事実と数字で証明されたのは、いちばん重い罪人からなるイングランドとスコットランドの懲役囚でさえ、イングランドとスコットランドの農業労働者ほどの苦役はしておらず、その食事も農業労働者よりはずっとよいことであった。しかし、そればかりではない。アメリカの内戦〔南北戦争〕の結果ランカシアとチェシアの労働者が街頭に放り出されたとき、この同じ上院は、いちばん安価でありふれた食品のかたちであたえられ、平均的にみて「飢餓病をまぬかれさせる」のにちょうどたりるだけの最小限の炭素と窒素の量はどれだけか、ということ調査するよう一人の医師に委託して、工業地区に派遣した。その医務委任代表スミス博士のたしかめたところでは、炭素二万八〇〇〇グレイン〔二グレインは〇・〇六四グラム〕、窒素一三三〇グレインが、平均的な成人一人を……飢餓病にかかる寸前にひきとめておく週間割当量であったが、そのうえ彼が見いだしたのは、この量が、極度の困窮の圧迫に余儀なくされた綿業労働者が実際にとつている乏しい栄養量にだいたい一致するということであった。だが、まあ聞きたまえ！ この同じ学識ある医師は、その後ふたたび枢密院医務官からの委託で、労働者階級の貧困層の栄養調査をおこなった。彼のおこなった調査の結果は、議会の命令で本年刊行された『第六次公衆衛生報告書〔★7〕』にまとめられている。医師はいったいどういふことを発見したか？ 絹織布工、裁縫女工、革手袋製造工、靴下編工などは、（年々）平均して、（失業した）綿業労働者のうけている困窮者施食ほどにも、つ